

表装裂デジタルアーカイブの展開

～京都表具協同組合の取り組み～

宮本真未*1 田中浩*2 熊崎康文*3

京都表具協同組合は「掛け軸オンラインシミュレーター【表装ぎれ愉しむ】」を2021年2月10日から一般公開を始めた。誰でも自由に、書画に合わせた好みの掛け軸のデザインをオンライン上でできるものである。これを可能にしたのは京都表具協同組合が過去に記録保存した1500点の表装裂デジタルアーカイブの存在がある。今回、京都表具協同組合の協力を得て、この表装裂デジタルアーカイブの取り組みを報告する。

<キーワード>表装裂, デジタルアーカイブ, 京都表具協同組合, シミュレーター

1. はじめに

わが国の書画にはいわゆる掛軸に代表される表装が施されている。表装の意味や多様性について関心を抱き、調査を始めた。

文献調査の過程で、京都表具協同組合が手がける「掛け軸オンラインシミュレーター【表装裂愉しむ】」¹に出合った。

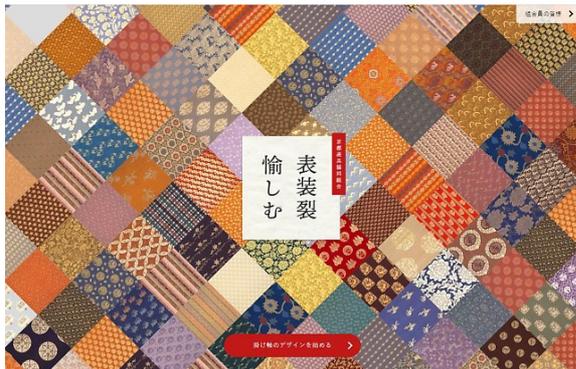


図1 掛け軸オンラインシミュレーター画面

掛け軸の各パーツで使用する表装裂をオンラインで自由に選んでデザインできる。図2は同サイト上のサンプル書画で2種類シミュレートしたものである。

このシミュレーターには、書画にあたる本紙のサンプル画像が選べ、表装したい書画に似た画像を選ぶことができる。

本紙上下の一文字と風帯の部分、本紙と一文字の周りの中廻し部分、その上下の天地部分の各裂を、色や裂の種類、紋様の計600点の裂の画像から選択でき、軸先も25点の中から選択できる。

書画の表装は専門店等に出向き、表具師と相談しながら依頼するのが一般的であるが、オンライン上で様々な表装デザインが可能な



図2 掛け軸オンラインシミュレーターでのデザイン(2種)

のが画期的であると考えられる。本に出合う

図2のように、裂の選択により本紙の雰囲気が変わる。ただ、本紙が画か書か、仏画か風景画かなどの種類により、軸装の種類や裂地の組合せに一定の約束があり、ある程度選択の幅は絞られる。とはいえ、様々な裂を何通りも着せ替えできるこのシミュレーターには選ぶ楽しみがある。

以下、京都表具協同組合専務理事、田中浩氏にご教示いただき、表装裂デジタルアーカイブの展開について報告する。

2. 表装裂デジタルアーカイブの経緯

(1) 「表装裂愉しむ」誕生の背景

京都表具協同組合は1989年に『表装裂』①巻、1990年に『表装裂』②、③巻を光村推古

*1 MIYAMOTO, mami 岐阜女子大学 2 TANAKA, hiroshi 京都表具協同組合 *3 KUMAZAKI, yasufumi 岐阜女子大学

書院（株）から発行した。



図3 表装裂①②③巻（京都表具協同組合提供）

出版に際して 1500 点の表装裂をフィルムカメラで撮影し、1 巻あたり約 200 点、計約 600 点を掲載した。この時の撮影は、非常に豊富で貴重なコレクションとなった。

しかし、撮影したポジフィルムは書籍発行で4割が使用されたにとどまり、その後約30年間以下の理由で活用されなかった。

- ①出版以外の用途が見つからなかった。
- ②表装裂の紋様の整理、編集がされていなかった。
- ③デジタルデータ化する費用を捻出することができなかった。
- ④西陣織関係者との権利関係の調整ができていなかった。

フィルム寿命はメーカー公表値で撮影から約20年程度なので、フィルムの劣化が心配となった。幸いその保存状態は良好で、硬化・剥離は進んでいなかった。ただ、現状維持は難しく、まもなくフィルムとして使用できなくなる問題が発生していた。

もう一つの大きな問題はドラムスキャナーの使用期限だった。フィルムをデジタルデータ化するには、高性能のドラムスキャナーで高精細スキャンニングをする必要があった。しかし、デジタルカメラの普及でフィルムカメラの需要は激減、それに伴いドラムスキャナーの製造は中止され、保守期間も終了していた。また、交換部品が無く、故障に対応できなくなっていた。さらに、現存するドラムスキャナーは古いOS (Windows XP まで) しか対応できず、今後の使用には耐えられないことが予想された。ドラムスキャナーの使用期限を考えても表装裂のフィルムをデジタルデータ化するのに残された時間は少なかった。

こうした経緯の中で転機が訪れる。令和2年8月の「新型コロナウイルス感染症対策危機克服会議」で策定された京都府コロナ社会

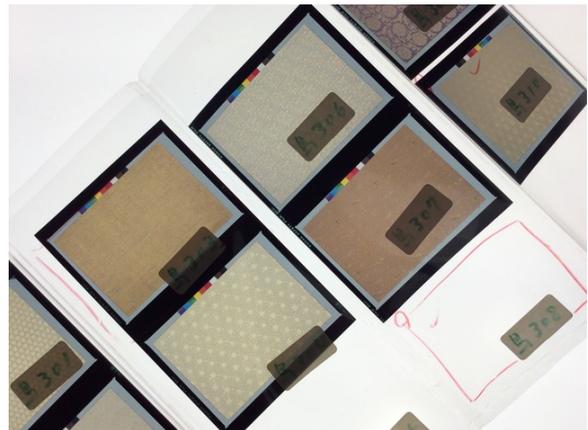


図4 表装裂を撮影したポジフィルム（京都表具協同組合提供）

対応ビジネスモデル創造事業補助金の公募申請だった²。ウィズコロナ・ポストコロナ時代の新しいビジネスモデル構築に、京都府から最大500万円の補助事業（補助率90%）だった。京都府が採択する補助事業なので、課題の一つの権利関係について府の「お墨付き」が期待でき、トラブルの緩和が可能と判断された。実質競争率は5倍であったが、計画内容、実現性を評価され、フィルムのデジタル化が採択された³。最後のチャンスを活かすことができたのである。

(2)基本事業計画の概要

事業の計画として第一に表装裂（1～3巻）収録分と非公開分、合わせて1500枚のポジフィルムの高精細デジタルデータ化を行った。第一に、既刊の『表装裂』（1～3巻）の再刊を想定し、画像サイズを商業印刷に十分対応できる精度を確保した。またそのデジタルデータは複数のハードディスクで永久保存することとした。第二に、オンライン上で表装の「取り合わせ」作業ができる「表装オンラインシミュレーター」を、広く一般公開することと再書籍化を検討することを目的とした。

(3)表装オンラインシミュレーター公開までの流れ

1995年ごろ、明治・大正時代に使われていた「取り合わせ帳」をデザイナーに見せ、CGで表装の取り合わせが可能か尋ねた。「簡単にできる」と回答を得たことが表装オンラインシミュレーターの原点となった。

当時使用されていたAdobe Photoshopを用いて画像加工し、裂の組合せを試みた。しか



図5 取り合わせ帳（京都表具協同組合提供）

し、同時期の家庭用コンピューターの処理能力では極めて時間がかかり、顧客に対してシミュレーターとして使用することは難しいことが判明し、自己満足程度で実用化には至らなかった。高性能なコンピューターの普及まで待つしかない判断、しばらくの間何もできない状態が続いた。

2000年ごろ、京都商工会議所等で「デジタルアーカイブ」が盛んに推奨され始めた。この時のデジタルアーカイブはデジタル化することが最終目的であり、多くの人はその後の活用まで考えていないように思えた。組合もポジフィルムデジタルデータ化を将来のためと計画したが、費用の問題で何度も断念を繰り返した。

また、光村推古書院から『表装裂』再出版の打診を受け、西陣織関係者と協議を行ったが、再出版は歓迎されず、関係悪化を危惧し断念していた。

時代が変わり、現在はデジタル化に対する考え方が柔軟になってきた。多くの西陣織関係者自身がデジタル活用を開始しており、拒否反応は随分和らいだ感があった。このタイミングで京都府コロナ社会対応ビジネスモデル創造事業補助金の公募を受けた。

計画にあたり出版社に著作権問題を確認、問題無しとの回答を得て表装オンラインシミュレーター開発を企画した。

当初、オンラインシミュレーターを一般公開か限定公開かで思案したが、限定公開では意味がないと一般公開に踏み切った。

(4)表装オンラインシミュレーター公開目的

表装オンラインシミュレーターの一般公開では、組合として以下の①～③を公開目的としているが、④の教育利用の追加を考えた。

①コミュニケーションツール・データベースとして活用する。

オンラインシミュレーターは顧客とのコミュニケーションツールであり、WEBサイトでの公開は多くの人との情報共有手段である。膨大な情報を単に蓄積するだけではなく、手間をかけずに探し出せ、活用する仕組みを構築することが目的である。

②視覚的な提案が可能であり、営業ツールとして活用する

ウイズコロナ・ポストコロナ時代においてはネットを利用した受注増が予想でき、オンライン受注で表装裂のデジタルデータを用いることで、視覚的でわかりやすい提案が可能となる。以前は取り合わせ帳をもとに実際の本紙と実物の裂をその場で取り合わせていた。それがオンラインシミュレーターでより具体的で様々な提案が可能となり、顧客満足度の向上、作業効率の向上が期待できる。

③新しいファン層の拡大を目指す

顧客に「自ら表装形式を選び」、「自ら表装裂を選び」、「自らの好み表具を作る」サイトとして利用してもらい、気に入った「取り合わせ」が出来れば、その画像を元に相談や注文を受けることができる。

④教育利用で伝統文化理解に資する

児童生徒が自分の書画作品をオンラインシミュレーターで表装することで、わが国の伝統的な表装や和柄の文化を理解することができる。今後、タブレット等で作品を撮影してシミュレーターに取り込むことができれば、表装の意味合いからも、自他の作品を尊重することにつながると思う。

3. 表装について

(1)表装の「取り合わせ」

表装の「取り合わせ」はオンラインシミュレーター開発には欠かせなかった。「取り合わせ」として重要なことは本紙の持つ意味を理解し、それに相応しい表具の意匠を考えることである。主役（本紙）を引き立たせる名脇役が表具という形を理想としている。そこに様々な規則に沿って表装裂の取り合わせを決めていく。

表装の取り合わせはおよそ次の3つの段階を経て行われる。

①表装形式

まず、使用目的、書画の意味、作者、書風・作風を考慮して表装形式を選定する。オンラインシミュレーターでは、「幢補三段表装仕立」、「幢補三段表装横物仕立」などの6つの型から選択できる。

②表装裂の組み合わせ

次にどのような表装裂を使うかを決める。仏用や茶道用など使用目的に応じた決まりごと、文字なら意味に合わせたり、季節感等を加味したりなど、本紙と表装裂の品格のある調和が重要である。例えば、優しい感じの本紙には優しい色や繊細な紋様の表装裂を用い、力強い感じの本紙には重厚感のある色や力強い紋様の表装裂を用いる。

③寸法割

最後に各表装裂の寸法、全体の寸法について、バランスの取れた違和感のない寸法割を行い、整える。

4. 表装裂デジタルアーカイブ事業の実績と今後の計画・展望

表装裂デジタルアーカイブ事業の展開により、以下の実績が生まれた。

- (1)表装裂ポジフィルムデジタル化により、組合の所有していた1,500枚のフィルムを高精細デジタルデータ化し、3台のハードディスクに永久保存した。また、表装裂をデジタルデータ化することで、蓄積されたデータを有意義に活用できるようになった。
- (2)表装オンラインシミュレーターの制作及びWEB公開により、WEBサイト上で掛け軸のデザイン（表装の取り合わせ）ができる仕組みを完成させ、令和3年2月10日に一般公開した。

現在、京都表具協同組合では以下の計画が実施あるいは進行中である。

- ・SNSの活用及び情報発信力の強化として、京都表具組合 Instagram (2021年12月)、「表装裂愉しむ」のInstagram開設 (2022年2月)
- ・京表具オンラインショップ (ECサイト) 開設 (2022年2月) 及びオリジナル商品 (道具・材料・素材) の開発と販売
- ・デジタル技術を活用した共同受注事業の推進

- ・図案本「表装裂愉しむ」第1巻植物文紋様編発刊 (2021年9月)、第2巻動物文様編の再出版予定
- ・オンラインシミュレーターへの表装裂、本紙画像、表装形式の追加登録
- ・額、屏風のシミュレーター機能の追加
- ・将来的にAR (拡張現実) 技術の導入

5. おわりに

今回の表装裂デジタルアーカイブの調査を通して、「表具は名脇役」という田中氏の言葉が印象に残っている。表装オンラインシミュレーターで同じ作品を各種シミュレートすると、本紙のイメージが大きく変化する。表装によって、本紙の価値が左右されることを実感した。

また、作品展の図録で表装部分を省き、本紙のみを掲載していることが多い。このことを表具師の方々に尋ねると、あまり快くはないという返答が返ってくる。主役は本紙であるが、主役の価値を引き立て輝かせることができる表具は、本紙と切っても切れない関係だと考える。

今後、表装裂デジタルアーカイブを通して表装の大切さや美しさ、価値に気づき、本紙と表装の二つがそろって一つの作品であるという意識が増えることを願っている。

謝辞

本研究にあたり、京都表具協同組合専務理事田中浩氏から多大なご協力を賜り感謝申し上げます。

参考文献

- 1 掛け軸オンラインシミュレーター【表装裂愉しむ】、京都表具協同組合、<https://hyosogire.com/>
- 2 コロナ社会対応ビジネスモデル創造事業補助金、京都府商工労働観光部産業労働総務課、<https://www.pref.kyoto.jp/sanroso/bussinessmodel-gaiyou.html> (2022. 2. 18 参照)
- 3 表装裂デジタルアーカイブ事業、コロナ社会対応ビジネスモデル創造事業補助金実績報告 (公開用) 令和3年2月26日、<https://www.pref.kyoto.jp/sanroso/documents/5kyotohyougu.pdf> (2022. 2. 16 参照)